

## 保育のヒント～「科学する心」を育てる～

### 感じる・真似る・表現する／武蔵野短期大学附属幼稚園（埼玉県）

子どもたちは多様な体験をしながら遊びを楽しみ、その体験を活かしながら遊びを展開しています。

「もっと楽しく！もっと面白く！」と繰り返し継続して遊ぶ子どもたちの姿から、「科学する心」が育まれることを読み取ることができます。

この事例では、3歳児がダイナミックに全身を使い模倣遊びを展開しています。お面や家（屋敷）など物との関わりや、友達や異年齢児との魅力的な関わりがあることにより、3歳児なりに自分たちで活発に遊びを進める姿が伝わってきます。



### ● お化けになる／3歳児

#### ✿ 事例 なりきり遊び（4月～6月）

##### ● 動物になりきる（4月）

春の遠足で行く動物園の体験が豊かになるように、動物が登場するリズムカルな体操を保育に取り入れた。すると、子どもたちはウサギやゾウなど様々な動物になりきり、リズムに合わせて体を動かすことを楽しんでいた。そして実際の動物園で動物を身近に見ることで、さらに動物に興味をもったようだった。

そこで保育者は保育室の製作コーナーに、ぬりえやお面として遊べるよう、動物の絵（線で型どったもの）が描かれた画用紙を用意した。子どもたちは、動物の描かれた画用紙を見付け、早速塗りだした。「動物園にウサギさん居たね」「大きいウサギさんも居たよね!」と友達との会話も弾み、動物園で見た動物を思い出しながら、色を塗る姿が見られた。

子どもたちが塗った動物の絵を、予め用意していたお面用のバンドに取り付け、動物のお面が完成すると頭に付けていた。子どもたちはそれぞれの動物になりきり「ウサギさんはピョンピョン跳ねるの」とウサギが跳ぶ真似をしたり、「ゾウさんだぞー」と腕を鼻に見立ててゆっくり歩いたり、それぞれの動物になりきって遊ぶ姿が見られた。



## ● 海の仲間になりきる（5月）

3歳児組のプール活動が始まった5月、子どもたちの“なりきり遊び”に変化が現れた。保育室に敷いてある青いマットの上に寝転がり、「ここは海なの!!」「海を泳いでるんだよ」と、手と足をバタバタと動かして遊んでいる。保育者が青いカラーポリ袋を提供すると「海のお水だ!!」「先生もっと頂戴!!」と海の水に見立てて遊び始めた。子どもたちは数日カラーポリ袋の海を泳いで遊んでいた。保育者は、この海の遊びが発展することを願い、「この海にはお魚も住んでいるの?」と質問してみた。子どもたちからは、「お魚が泳いでるよ」「あとタコとイカと…」と様々な海の生き物の名前があがった。そこで色画用紙を子どもたちから出た魚の形に切り保育室に用意しておく、「お魚がいる!!」「先生、海に貼っても良い?」と画用紙の魚達に目や口を描き壁に貼り始めた。水だけだった海が海の仲間達で大賑わいになっていった。中には、カラーポリ袋を足に巻いて人魚になりきって遊ぶ子どももいた。



## ● お姫様・ヒーローになりきる（6月）

海の仲間や人魚になりきって遊びだしてから何日か経ったある日のこと。Aちゃんが「先生、この端っこ結んで」と1枚のカラーポリ袋を保育者に手渡した。廊下で見かけた4歳児が付けているマントを見て憧れの気持ちを抱いた様で、マントの形に作り変えたいという要望であった。保育者が袋の端を結ぶと、できた穴に顔を入れマントにして嬉しそうに遊び出した。その姿を見ていた子どもたちから「お姫様みたい!!」「いいなあ」「私にも作って」と声が上がりだした。他のカラーポリ袋の端も結び、マントとして使えるようにすると、今度はお姫様やヒーローの“なりきり遊び”が始まった。



子どもたちは広告の紙を丸めてスティックを作ったり、スカートを履いてみたりと思い思いのお姫様の格好をして楽しんでいる。その様な姿を見た他の子どもたちも「ニンニンジャー登場!!」と、マントを借り、手裏剣をおでこに付けたり腕輪にしたりしてヒーローになりきっていた。

## ● 考察

4月当初、保育者の働きかけで広がった子どもたちの“なりきり遊び”であった。日々繰り返し遊ぶ中で、なりきる対象や表現方法・材料に変化が見られるようになっていった。興味の対象としては、動物や海の仲間・他学年のお兄さんやお姉さん・ヒーロー・プリンセス等、子どもたちが日頃興味をもっている物・身近な関わりのある物等が多く、それらが子どもたちのなりきりの対象になることが改めて分かった。又、保育者や友達と共に、なりきる対象の一部(動物の顔や衣装等)を作ることによって、「自らの思いを具現化し身に付ける楽しさを味わい、より一層なりきって遊ぶ」子どもたちの姿を捉えることができた。友達同士の関わり合いが増えていくことも分かった。

## ✦ 事例 お化けになりきる（6～9月）

### ● 5歳児が作ったお化け屋敷の客になる

4・5歳児組がクラスごとにお花屋さんやレストラン等、様々な店を開いたお店屋さんごっこ。3歳児組はお客として参加をした。気に入った店には何度も繰り返し遊びに行っていた子どもたちだったが、中でも5歳児組のお化け屋敷が印象深かった様で、保育者や友達を誘い何度も訪れていた。保育室に戻ると、「お化け怖かったね!!」「また明日も行きたいなー」と毎日お化け屋敷についての会話で盛り上がっていた。

お店屋さんごっこが終わった保育室では、「お化けだぞー」と、お化け屋敷で見たお化けの真似をして友達を脅かす姿が見られるようになった。その様な中、今まではままごとに使っていた「段ボールのお家」（物）にマントとして使っていた青いカラーポリ袋を友達と協力しながら貼り付けている2人の子どもがいた。「何を作っているの?」という保育者の問いかけに「お化け屋敷の上からぶら下がってるやつだよ!!」と、真似て作っていることを誇らしげに答える2人。その2人を筆頭に「段ボールのお



家」をお化け屋敷に改造した子どもたち。今まではお面やマント等の個人製作が多かった“なりきり遊び”であったが、友達同士で1つの物を協力して作る姿が見られる様になった。



### ● お化けになりきる

子どもたちは、段ボールのお化け屋敷に他クラスの担任や友達を呼んだり、友達同士で脅かしたりしてお化けごっこを楽しんでいた。そんなある日「先生ここにお化け描いて」と1人の子どもに画用紙を渡された。保育者がお化けを描くと、「お化けだぞー」と嬉しそうに顔に当てお化けの真似をする姿があった（5歳児組が付けていたお面や、動物になりきって遊んでいた時に付けていたお面を思い出した様だった）。保育者がお面の前が見える様に目の穴を開け、お面ベルトを付けると、「お化けだぞー」と嬉しそうに友達を脅かしに行く姿が見られた。その姿を見ていた友達が「私も作りたい!!」「僕もお化けのお面作る!!」と画用紙にお化けを描き始める。初めは、保育者が描いたお化けを真似した同じ顔のお化けばかりであったが、お面作りを繰り返していくうちに、一つ目のお化けや、ギザギザの歯が沢山並んでいるお化け、縦に長細い顔のお化け等…子どもが想像した沢山のお化けの顔が出来上がり、保育者が目の穴とお面ベルトを付けると保育室がたちまちお化けだらけになった。



### ● 考察

お店屋さんごっこで興味をもち何度も繰り返し経験した5歳児組のお化け屋敷。子どもたちは5歳児が作ったお化け屋敷に驚き、感動し、興味をもった。学級の多くの子どもが同じ憧れの対象をもったことで、より具体的なイメージのもとで製作を進めることができたのではないかと。実際にお化け屋敷にカラーポリ袋を貼る子どもたちは「上から貼ろう!!」「下がビリビリだね」と5歳組のお化け屋敷の装飾を思い出し、友達の意見に相槌を打ちながら作っていた。

このことから、なりきる対象のイメージが具体的であり、友達と共通した物であると、子ども同士の関わりも深くなりより遊び込めることが分かった。